

名大医学部学友時報 2019 5

目次

病院長就任挨拶	小寺 泰弘 …………… (1)	私の旅行カバン	古森 公浩 …………… (9)
准教授就任	中黒 巨人 …………… (3)	名古屋大学医学部附属病院 診療体制一覧表(1)	…………… (10)
	竹内 研時 …………… (4)	令和元年度 大学院新入生名簿	…………… (13)
特任教授就任	中井 康博 …………… (5)	令和元年度 医学部新入生名簿	…………… (14)
人事トピックス	柴田 玲 …………… (6)	クラス会だより 四六会	杉浦ミドリ …………… (15)
	矢嶋伊知朗 …………… (7)	第110回名古屋大学医学部学友大会ご案内	…………… (15)
会員寄稿	浜島 信之 …………… (8)	編集後記	…………… (16)

病院長就任挨拶



病態外科学講座 消化器外科学 教授

こでら やすひろ
小寺 泰弘

名古屋大学医学部学友会の皆様。私こと、この度2019年4月1日付で病院長に就任させていただきました。この場を借りてご挨拶申し上げます。

2月に行われたJoint Commission International (JCI) という国際機能評価の本受審に向け、石黒前病院長のリーダーシップのもと病院をあげて全力で対応し、見事に合格することができました。しかし、この挑

戦に伴う心身の消耗は中心的な役割をはたしていなかった私にとっても激しいものがあり、新執行部のメンバーや役割分担を決めるのが遅れ、新体制は時代にそぐわない緩徐なスタートを切りました。

私はこれまでの3年間、副院長として最低限の仕事はしてまいりましたが、その間にきちんとした将来展望を醸成していたわけでもなく、石黒前病院長の働きぶりを大変だなあと他人事のように見ていただけでしたので、今になって慌てて抱負を考えている体たらくです。生来、一夜漬けのようなことは好きではなく、基本的には何事も慎重かつ計画的に進めるというのが私のこれまでの生き方でしたが、今回ばかりは準備不足のまま大役に挑んでいる感が否めません。病院長になり景色は大きく変わりました。院内のあちこちで毎日何かが企図され、何かが実行され、また、何かが起きており、その各々について当事者として関わっている人たちは必ずおられるのですが、最終責任は私にあります。これは信じ難いほど重いことであり、これらを統括するには木も見て、森も見て、ついでに個々の細胞も見るとような常人としてはありえない洞察力とリーダーシップが要求されているように思われます。

私は消化器外科医であり、現在消化器外科1の榎野教授と協力して消化器外科1と消化器外科2の統合を進めております。JCI受審の影響はここでも大きく、4月の段階では当初のタイムスケジュール通りの診療体制には至っておりませんが、まずは両診療科合同で症例検討を行う状況を作りました。最終的にはわが国でもトップレベルの規模と内容の、番号がついていない(患者さんに

分かりやすい) 消化器外科が誕生することになり、これは病院にとっても大変良いことだと思っております。もちろん、そこに至るには、学友会の皆様の温かいご支援が不可欠です。

わが国の医療全体に関わる大きな問題として新専門医制度があります。日本専門医機構を立ち上げ、国民に分かりやすい専門医制度を構築する構想だったはずですが、新制度が地域医師偏在をさらに増長することを懸念する意見が医道審議会で出され、足踏み状態が続いています。国はこの機に乗じて医師の地域偏在と診療科偏在の解消を一気に進めようとしており、新専門医制度における専攻医の配置は特定行為看護師の養成・配置と共に働き方改革を実現するための両輪となっている感があります。働き方改革はすべての病院にとって重要かつ困難な課題ですが、名大病院でもこの先5年の執行猶予期間の間、対応に悩み抜くこととなります。

現在の名大病院では建物も医療機器も全体的に老朽化している中、それに対する手当てが十分にできていません。そして、過日出席した全国国立大学病院長会議での議論を聞く限り、いずれも似たような厳しい経営状態にあります。しかし、モノは買ってもらえない。日常は大学病院ならではの面倒なルールで縛られる。勤務時間は長い。そんな職場で喜んで働いてくれるスタッフはおりません。必要な医療機器を揃え、基本的なルールは変えられなくともその実施において少しでも無駄を省けるようにするなど、努力してまいりたいと思います。一方、勤務時間の短縮には適正な人員配分に加えて業務を見直し、効率化を図ることも重要で、この点についてはすべてのスタッフにますますの創意工夫をお願いするところです。

当院は高度な機能を持つ病院として国から様々な資格を承認いただいております。これらの資格を維持するだけでも大変ですが、さらに指定国立大学にふさわしい臨床研究を行い、業績を出すことが強く求められております。そのためにも、臨床研究支援センターの優れた機能をよく理解し、さらに有効に活用できるよう努力してまいります。もちろん、治験や特定臨床研究に御参加いただく患者さんのリクルートには、学友会の皆様のご支援が不可欠です。

この素晴らしい病院の病院長にふさわしい人間に成長し、何とか任務を果たせるよう尽力いたします。皆様のご指導ご鞭撻をお願いいたします。

◎ 病院長就任インタビュー ◎

—— 現在の心境と抱負をお聞かせください。

4月を迎えるにあたって、考えることが多く大変プレッシャーを感じております。現在の時代の流れというのは悪い方向にあります。それは大学病院にも当てはまる話であり、この決して豊かでない状況下で、限られた

リソースから患者にとっても素晴らしくさらにスタッフにとっても満足のいく環境づくりをしていこうと考えております。

—— 名大病院の強みは何でしょうか。

基本的には「名大病院」というブランドです。「やはり名大病院だ」と皆が思ってくれている内は、名大ブランドは多岐に渡って有利に働くものです。一方、当然ですが名大ブランドに胡坐をかくことなく、これを守り通す事が当然必要になります。これに加えて名大病院の強みとして多数の関連病院が挙げられます。これは財産であり足枷でもあります。関連病院が多いと、それだけ多くの医師を派遣しなければなりません。医師にとってはどこかに働く場があることとなります。また患者さんのデータを集めやすく関連病院と一体になりしっかりとした研究ができる可能性があります。一方で、関連病院できちんと研究を行うことを支援する体制は十分でない現状もあります。この現状を改善することで関連病院は名大病院の一層の強みになると考えます。

—— 今後の展望と課題をお聞かせください。

正直な所、日本の現状、そして全国的な大学病院の運営状況の悪さを考えると展望というのは決して明るくはないです。この難局をどのように乗り切るかということを考えなければなりません。病院としてやるべきことは当然やっていく訳ですが、それに加えてプラスアルファの何かで打破していかなければなりません。これは私自身だけで思いつくような物ではないのかもしれませんが。皆様の意見を集約するというよりは、誰かの突出した(天才的な)提案が救世主になるのかもしれませんが。世界から見た名古屋大学のランキングに対する懸念も持っています。医学部においては translational research にやや難があるのかもしれませんが。今後は優秀な基礎研究者と有能な臨床家の一層のコラボを推進したいと考えております。そのためにはやはり、難しいことではありますが基礎分野とコラボレーションをより強くしていくことを考えています。

—— 最後に学生へのメッセージをお願いします。

学生のうちはたくさん時間があるから今のうちに遊びなさいという人もいれば、しっかり勉強をなさいという人もいます。いずれも一理ありますが、今ほど時間があることが医師になってからはないのは確かです。学生さんにはその時間を何かに資する時間として使って頂きたいです。付け加えて学生には健康管理を大切にしてください。医師になると非常に多忙になり不摂生になりがちです。体が財産であることを覚えていてほしいです。

(インタビュー：栗田 祥太郎、山邊 晃)

准教授就任

高次医用科学講座 臓器病態診断学分野

なかぐろ まさと
中黒 匡人

〈略歴〉

- 2003年3月 名古屋大学医学部医学科卒業
 2003年5月 公立陶生病院研修医
 2009年4月 名古屋大学大学院臓器病態診断学博士課程
 2014年4月 名古屋大学医学部附属病院病理部助教
 2017年7月 同講師
 2018年11月 名古屋大学大学院臓器病態診断学准教授

〈業績〉

1. Urano M, Nakaguro M, Yamamoto Y, Hirai H, Tanigawa M, Saigusa N, Shimizu A, Tsukahara K, Tada Y, Sakurai K, Isomura M, Okumura Y, Yamaguchi H, Matsubayashi J, Nagao T. Diagnostic Significance of *HRAS* Mutations in Epithelial-Myoepithelial Carcinomas Exhibiting a Broad Histopathologic Spectrum. *Am J Surg Pathol*. 2019 [in press]
2. Suzuki Y, Ichihara S, Kawasaki T, Yanai H, Kitagawa S, Shimoyama Y, Nakamura S, Nakaguro M. β -catenin (*CTNNB1*) mutation and LEF1 expression in sinonasal glomangiopericytoma (sinonasal-type hemangiopericytoma). *Virchows Arch*. 2018; 473(2): 235-239
3. Nakaguro M, Urano M, Suzuki H, Yamada K, Sakaguchi A, Ogura K, Matsumoto T, Ono N, Asato T, Mikami Y, Imai H, Nagao T. Low-Grade Intraductal Carcinoma of the Salivary Gland with Prominent Oncocytic Change: A Newly Described Variant. *Histopathology*. 2018; 73(2):314-320.
4. Nakaguro M, Kiyonari S, Kishida S, Cao D, Murakami-Tonami Y, Ichikawa H, Takeuchi I, Nakamura S, Kado-matsu K. Nucleolar protein PES1 is a marker of neuroblastoma outcome and is associated with neuroblastoma differentiation. *Cancer Sci*. 2015; 106(3): 237-43.

学友会の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、2018年11月1日付で名古屋大学大学院医学系研究科臓器病態診断学の准教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は2003年に名古屋大学医学部を卒業し、公立陶生病院にて初期臨床研修を経て病理部(現病理診断科)の専攻医となり、小野謙三先生、鈴木康彦先生のご指導のもと専門医資格を取得致しました。その後中村栄男教授の指導を仰ぎ大学院入学し、今までやってきた病理診断と全く異なる世界でという事で、分子生物学講座の門松健治教授のもとで神経芽腫の研究に従事致

しました。学位取得までは時間を要しましたが、2013年より病理部に戻り、大学病院での病理診断・病理学的研究を行って参りました。

病理学は形態を重視する学問と考えております。組織像の多彩さやその特異な腫瘍細胞の構成から唾液腺腫瘍に興味を持ち、現在専門として研究に取り組んでおります。唾液腺腫瘍は、良性悪性を含め多種の組織型の腫瘍がほぼ同様の組織像を呈する事があり、病理医にとってなかなか手強い腫瘍の一つです。また、上皮性の腫瘍でありながら、単純な遺伝子変化(融合遺伝子、点突然変異)により生じる腫瘍の割合が高いのも特徴です。症例数が他の臓器の癌腫に比べて少なく、その腫瘍発生や腫瘍の(経時的変化による)進化の機序はまだ十分に明らかにされていないのが現状です。適切な診断を行い、そして学問の基盤たるに耐える診断基準を確立し、その上で病理学的研究を行ってゆくことが肝要と考えております。研究に当たっても、症例数の少なから単一施設での研究はなかなか難しく、東京医科大学の長尾俊孝教授、藤田医科大学の浦野誠先生らと共同研究をして参りました。その成果は徐々に出てきており、今後は自施設の症例を主体とした研究に繋げていく事ができればと考えております。

より日常の病理診断と関係の深い事として、消化器内科の先生方を中心として共同研究も手掛けて参りました。臨床的な知見、分子生物学的な知見が重要なのは言うまでもありませんが、それでもなお腫瘍あるいはもっと広く考えれば炎症を含めた病変そのものの形態を忘れて疾病を議論する事ができないのも事実です。病理学的な用語というのは臨床の立場からは理解しにくく、また細胞や組織という顕微鏡的な視点そのものが親しみにくいと思います。臨床の先生方にとってより開かれた病理部となり、よりよい議論を経て、臨床の先生方のより質の高い診療あるいは論文などでのデータの発信に寄与できればと思っております。

幸い名古屋大学には毎年病理を志す若い先生方が一定数おられます。近年の新専門医制度では、大学とその関連の医療施設とは一層の結びつきが要求されており、こういった若い先生方を、広い知識と経験を持ったより多くの先生方によって、地域としてあるいは施設群として教育する事ができればと考えております。私自身が学生の頃、あるいは初期研修医の頃には病理に携わる事を全く考えておりませんでしたので、やはり病理の面白さや重要さを気づかせる環境や教育こそが今後の病理を支えていくと考えております。そして私自身が今後も可塑性をもって旺盛に知識を吸収し、学友会の先生方あるいは症例を通じて患者様から教育を受ける立場でもあります。今後とも何卒ご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

准教授就任

社会生命科学講座 予防医学

たけうち けんじ
竹内 研時

〈略歴〉

- 平成21年3月 東北大学歯学部卒業
 平成25年3月 東北大学大学院歯学研究科博士課程修了
 平成25年4月 九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学分野助教
 平成31年3月 名古屋大学大学院医学系研究科予防医学分野准教授

〈業績〉

1. [Takeuchi K](#), Matsumoto K, Furuta M, et al. Periodontitis is associated with chronic obstructive pulmonary disease. *J Dent Res* 2019 (2019;98:534-540).
2. [Takeuchi K](#), Matsumoto K, Furuta M, et al. Periodontal status and lung function decline in the community: the Hisayama study. *Sci Rep* 2018;8:13354.
3. [Takeuchi K](#), Ohara T, Furuta M, et al. Tooth loss and risk of dementia in the community: the Hisayama Study. *J Am Geriatr Soc* 2017;65:e95-e100.
4. [Takeuchi K](#), Aida J, Ito K, et al. Nutritional status and dysphagia risk among community-dwelling frail older adults. *J Nutr Health Aging* 2014;18:352-357.
5. [Takeuchi K](#), Aida J, Morita M, et al. Community-level socioeconomic status and parental smoking in Japan. *Soc Sci Med* 2012;75:747-751.

学友会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、平成31年3月1日付けをもちまして名古屋大学大学院医学系研究科予防医学の准教授を拝命いたしました。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

わたしは平成21年3月に東北大学歯学部を卒業後、同大学大学院歯学研究科国際歯科保健学にて、小坂健教授のもと、相田潤先生にご指導いただき、社会疫学研究（健康・疾病に影響を与える社会的決定要因を探索することを目的とした疫学研究）に取り組みました。当時の研究テーマの一つは、幼児の受動喫煙防止を目指した親の喫煙行動の社会的決定要因の検討でした。その研究の中で、幼児の親の喫煙行動は自身の社会経済的な状況以上に地域の社会経済的な状況の影響を受けるという結果を報告しました。昨年、2020年の東京オリンピック・パ

ラリンピックに向けて東京都で受動喫煙防止条例が策定され、国としても受動喫煙対策を強化する改正健康増進法が成立しました。このような機運の中、個人の努力はもちろんのこと公衆衛生的観点での受動喫煙防止の取り組みの必要性を当時の研究と絡めて再認識しております。

大学院修了後、平成25年4月から九州大学大学院歯学研究院口腔予防医学の助教として、山下喜久教授のもと、6年間研究と教育を中心に携わりました。研究面では基礎研究を土台に健康増進を目指す新たな視点が加わり、それまで以上に多数の施設・機関と共同研究を行う機会も増え、乳幼児から高齢者まで様々なライフステージを対象とした疫学研究に取り組みました。特に、成人・高齢者を対象とした研究では、50年以上の歴史を持つ久山町コホート研究の歯科部門を担当させていただいたことで、口腔の健康と認知症や慢性閉塞性肺疾患（COPD）などのNCDsとの関連を成果報告することができました。認知症については、歯の本数と型別の認知症発症との関連を検討し、歯を失うことが全ケースの認知症およびアルツハイマー型認知症の発症リスクの増加に関わることを示しました。また、その成果はWiley社のResearch Headlineで紹介され、国内外様々なメディアで取り上げられました。COPDについては、歯周病と1秒量の急速減少やCOPD発症との関連を検討し、歯周病の重症化が1秒量の急速減少ひいてはCOPDの発症リスク増加に関わることを示しました。COPDの発症要因は喫煙を主とする有害物質の長期吸入であることはこれまで知られていましたが、非喫煙者の発症要因はほとんど検討されてきませんでした。そうした背景の中、近年全身の健康を脅かす病気として知られる歯周病がCOPDのリスク因子という新たな一面を持つ可能性が示されたことで、昨今謳われる過剰な数の歯科医院が、COPD予防に向けた適切な歯周病管理の場として上手く機能することを一歯科医師として願ってやみません。

浅学の身ではございますが、今後の抱負としまして、若井健志教授のもと、予防医学教室最大の研究プロジェクトである日本多施設共同コホート研究（J-MICC研究）の運営に尽力するとともに、予防医学の研究および教育に一層精励いたす所存でございます。最後に、これまで名古屋大学の諸先輩方が築いてこられた歴史と伝統を尊重し、本学の一員としてその名に恥じぬよう精進いたして参りますので、学友会の皆様にはどうかご指導・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

特任教授就任

名古屋大学医学部附属病院 先端医療開発部 特任教授

なか い やす ひろ
中井 康博

〈経歴〉

1985年3月 金沢大学理学部化学科 卒業
2008年3月 名古屋市立大学薬学研究科博士後期課程 修了
1985年～1998年 持田製薬株式会社
1998年～2007年 ファイザー
2007年～2018年 大正製薬株式会社
2019年3月 名古屋大学医学部附属病院 先端医療開発部 特任教授

〈業績〉

1. Nakai Y, Inoue K, Yuasa H. et al. Functional characterization of human proton-coupled folate transporter/heme carrier protein 1 heterologously expressed in mammalian cells as a folate transporter. *J Pharmacol Exp Ther*. 2007 Aug;322(2):469-76.
2. Inoue K, Nakai Y, Yuasa H. et al. Functional characterization of PCFT/HCP1 as the molecular entity of the carrier-mediated intestinal folate transport system in the rat model. *Am J Physiol Gastrointest Liver Physiol*. 2008 Mar;294(3):G660-8
3. Hosea NA, Maurer TS, Jones H, Nakai Y, Beaumont K. et al. Prediction of human pharmacokinetics from preclinical information: comparative accuracy of quantitative prediction approaches. *J Clin Pharmacol*. 2009 May;49(5):513-33
4. Chino Y, Nakai Y, Yamaguchi J, Nakanishi T, Tamai I. et al. SGLT2 inhibitor lowers serum uric acid through alteration of uric acid transport activity in renal tubule by increased glycosuria. *Biopharm Drug Dispos*. 2014 Oct;35(7):391-404
5. Miyata A, Mizuno-Yasuhira A, Chino Y, Nakai Y, Yamaguchi JI. et al. Metabolite profiling and enzyme reaction phenotyping of luseogliflozin, a sodium-glucose cotransporter 2 inhibitor, in humans. *Xenobiotica*. 2017 Apr;47(4):332-345

学友会の皆様はじめまして、2019年3月付で名古屋大学医学部附属病院 先端医療開発部 先端医療・臨床研究支援センター 特任教授を拜命いたしました中井康博と申します。謹んでご挨拶を申し上げます。

私は金沢大学理学部化学科の生化学教室にてステロイド生合成にかかわるP450の研究にかかわったことをきっかけに33年間3つの製薬企業にて主に薬物動態の研究、後に臨床開発の統括に携わってまいりました。2社目の勤務先であるファイ

ザーの日本研究所が愛知県にあった事が当地との縁となっております。

私の研究歴は、御殿場にあった持田製薬の研究所にてヒト尿由来のタンパク製剤であり、急性膵炎・急性循環不全の治療薬ウリナスタチン、既に市場からは撤退している第2世代の抗ヒスタミン薬アステミゾール、鷺口瘡の治療薬フロリドゲルの薬物動態、PK-PD解析から始まります。その後知多郡武豊町、英国サンドイッチにあったファイザーの研究所にて化合物のヒトPKを予測する方法論、昨年韓国にて承認を得た逆流性食道炎治療薬であるpCABのテゴプラザン等多数の医薬品候補の創薬研究に携わりました。ファイザーの研究拠点整理後、大正製薬に移り大宮にある研究所ついで東京の開発本部にて、二型糖尿病治療薬SGLT2であるルセオグリフロジンの創薬研究、臨床開発、承認申請や経皮吸収型NSAIDs製剤エスフルルビプロフェンパップの臨床開発、承認申請を担当しました。医薬品候補のヒトにおける初めての投与試験FIHは国内外で約20品目経験いたしました。

また、ファイザーと大正製薬に勤務している期間である2006年から2008年にかけて名古屋市立大学薬学研究科にて当初ヘム鉄の輸送タンパクと報告されたトランスポーターが葉酸類をも輸送すること、消化管内の生理学的環境では葉酸類の輸送がこのタンパクの本質的な機能であることを明らかにして博士の学位をいただきました。

今回、ご縁があり名古屋大学医学部附属病院 先端医療開発部 先端医療・臨床研究支援センターのメンバーとして着任させていただきました。今まで企業にて経験してきたウェットラボでの実験、ドライラボでのモデリング・シミュレーション、プロジェクトマネジメント担当部署での当局対応、臨床データサイエンス体制の構築、臨床開発部門のマネジメント等を当センターにて活用できればと考えております。製薬企業での研究開発はアカデミアでの研究とは少し異なり、いかに早く製品に到達するかといった方法論を用いておりましたが根本にあるサイエンスは同じであり、当職に於いては先生方の臨床研究をよりよくサポートできればと考えております。

着任して当センターが関わる革新的医療のプロジェクト一覧を拝見させていただきました。素晴らしいシーズ案件が多く存在していることに驚いております。また、研究資金の調達など難しい問題が存在していることも認識いたしました。微力ながら先生方の研究を後押しして、重い病に苦しむ患者様のもとに革新的医療を届けることができるよう努力して参る所存であります。

学友会の皆様におかれましては、よろしくご指導とご鞭撻をいただきますよう、お願い申し上げます。

人事トピックス

先進循環器治療学寄附講座 教授

しばた 柴田
れい 玲

〈略歴〉

- 1996年3月 久留米大学医学部卒業
 1996年4月 同 大学院 入学・第3内科（現心臓血管内科）入局
 2001年3月 同 卒業（医学博士 取得）
 2001年4月 大牟田市立病院 循環器内科
 2003年7月 ボストン大学 Whitaker 心血管研究所・研究員
 2006年9月 名古屋大学大学院医学系研究科 循環器内科学・特任助手
 2009年9月 名古屋大学大学院医学系研究科 循環器内科学・特任講師
 2015年11月 名古屋大学大学院医学系研究科 先端循環器治療学講座・准教授
 2019年2月 名古屋大学大学院医学系研究科 先進循環器治療学寄附講座・教授

〈業績〉

- Shibata R, Kai H, Seki Y, Kato S, Morimatsu M, Kaibuchi K, Imaizumi T. Role of rho-associated kinase in neointima formation after vascular injury. *Circulation*. 2001;103:284-289
- Shibata R, Ouchi N, Ito M, Kihara S, Shiojima I, Pimentel DR, Kumada M, Sato K, Schiekofer S, Ohashi K, Funahashi T, Colucci WS, Walsh K. Adiponectin-mediated modulation of hypertrophic signals in the heart. *Nat Med*. 10(12):1384-1389, 2004.
- Shibata R, Sato K, Pimentel DR, Takemura Y, Kihara S, Ohashi K, Funahashi T, Ouchi N, Walsh K. Adiponectin protects against myocardial ischemia-reperfusion injury through AMPK- and COX-2-dependent mechanisms. *Nat Med*. 11(10):1096-1103, 2005.
- Ouchi N, Higuchi A, Ohashi K, Oshima Y, Shibata R, Akasaki Y, Shimano A, Walsh K. Secreted frizzled-related protein 5 functions in adipocyte-macrophage crosstalk as a modulator of obesity-induced metabolic dysfunction. *Science*. 329(5990):454-7, 2010.
- Kataoka Y, Shibata R, Ohashi K, Kambara T, Enomoto T, Uemura Y, Ogura Y, Yuasa D, Matsuo K, Nagata T, Oba T, Yasukawa H, Numaguchi Y, Sone T, Murohara T, Ouchi N. Omentin prevents myocardial ischemic injury through AMPK- and Akt-dependent mechanisms. *J Am Coll Cardiol*. 63(24):2722-2722, 2014.
- Tanigawa T, Shibata R, Shiga A, Murohara T. Left jugular phlebotasia in an elderly patient. *Circulation*. 2014 14. 130(16):1416-1417, 2014
- Otaka N, Shibata R, Ohashi K, Uemura Y, Kambara T, Enomoto T, Ogawa H, Ito M, Kawanishi H, Maruyama S, Joki Y, Fujikawa Y, Narita S, Unno K, Kawamoto Y, Murate T, Murohara T, Ouchi N. Myonectin is an exercise-induced myokine that protects the heart from ischemia-reperfusion injury. *Circ Res*. 123(12):1326-1338, 2018.

学友会の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し

上げます。この度、2019年2月1日付で名古屋大学大学院医学系研究科先進循環器治療学寄附講座教授を拝命いたしました。この場をお借りして謹んでご挨拶申し上げます。

私は、1996年に久留米大学医学部を卒業後、同第3内科学教室（循環器・高血圧・腎臓病学、現：心臓血管内科）に入局しました。一般内科および循環器内科・腎臓内科・CCUでの臨床研修を受けた後、1998年より大学院生として、甲斐久史先生（現：久留米大学医療センター教授）、今泉勉先生（現：久留米大学名誉教授）のご指導のもと、主に動脈硬化における分子生物学的研究を行いました。大学院卒業後は、2001年4月より循環器内科医として福岡県の大牟田市立病院に勤務しました。この間に心臓カテーテル検査や冠動脈形成術、ペースメーカー植込み術、IABP/PCPS挿入等の多くの観血的処置の経験を積むことができました。臨床現場では、様々な疑問点や問題点に直面しました。これらを突き詰めたい思いもあり、海外留学を決意しました。留学先の選定に関して、現在もご指導いただいている名古屋大学循環器内科 室原豊明教授に相談をし、2003年7月よりボストン大学ワイタッカー心血管研究所（Kenneth Walsh 教授）に留学いたしました。以降、「肥満はなぜ心臓病を発症するのか？」という疑問に対して、脂肪組織から分泌されるアディポネクチンに興味をもち、心臓血管系におけるアディポサイトカインの研究をスタートしました。その結果、アディポネクチンの心肥大抑制効果や心筋梗塞縮小作用などを見出すことができました。帰国後の2006年9月からは、留学の機会を与えてくださった室原豊明教授のもと名古屋大学循環器内科にてお世話になることとなりました。一般循環器診療のみならず、循環器専門医・総合内科専門医・再生医療認定医・抗加齢医学専門医・産業医としての独自のアプローチで、メタボや生活習慣病の予防や改善に特化した診療も展開しています。研究では、「心血管病に対するアディポサイトカイン治療の開発」や「アディポサイトカインを用いた早期診断を補助するバイオマーカーの開発」を目指しています。加えて、皮下脂肪組織由来幹細胞を用いた再生医学の研究にも従事しています。私どもは、脂肪組織由来幹細胞が、血管新生促進作用を有することを見出し、重症虚血肢患者を対象に、皮下脂肪から単離した脂肪組織由来幹細胞移植を施行しました。施行した多くの症例において下肢切断が回避でき、良好な結果が得られています。システム確立のため、基礎研究／トランスレーショナル研究／臨床研究を遂行し、有効性や安全性の検証、規制への対応、倫理的問題の解決など多くの経験をさせていただいています。これは私のかけがえのない財産です。

先進循環器治療学寄附講座は、上述の知見を推し進めることはもちろん、不整脈・心不全に特化し、継続的な研究と診療実績の蓄積、医療データベースの確立を行うことで、新規治療法の開発や疾患病態解明を目指す目的に設立となりました。「どんな問題にも答えが必ずある。だけどそれをすぐに導き出せるとはかぎらない。そのたびに悩むことに価値がある。答えを出すためには、自分自身の成長が求められている場合も少なくない。だから人間は学び、努力し、自分を磨かなきゃいけない。」ガリレオシリーズの湯川博士の言葉です。夢をもち、決して諦めず、誠実に努力を重ね、名古屋大学の発展に少しでも貢献できるよう精進したいと思います。最後になりますが、名古屋大学学友会の諸先生方におかれましては、今後ともどうぞご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

人事トピックス

芝浦工業大学システム理工学部生命科学科 教授

やじまいちろう
矢嶋伊知朗

〈略歴〉

1996年3月 東北大学 理学部生物学科 卒業
 1998年3月 東北大学 理学研究科生物学専攻 博士課程前期 修了
 2001年3月 東北大学 理学研究科生物学専攻 博士課程後期 修了
 (博士(理学))
 2001年4月 日本学術振興会 特別研究員 (PD)
 2003年9月 Institut Curie, France, Post doctoral research fellow
 2007年9月 中部大学 生命健康科学研究所 助手
 2009年8月 中部大学 生命健康科学研究所 研究員
 2013年4月 名古屋大学 大学院医学系研究科 環境労働衛生学 特任助教
 2015年5月 名古屋大学 大学院医学系研究科 環境労働衛生学 講師
 2019年4月 芝浦工業大学 システム理工学部 生命科学科 教授

〈業績〉

1. Yajima, I., Kumasaka, M. Y., Iida, M., Oshino, R., Tanihata, H., Al Hossain, A., Ohgami, N. and Kato, M. (2017). "Arsenic-mediated hyperpigmentation in skin via NF-kappa B/endothelin-1 signaling in an originally developed hairless mouse model." Arch Toxicol.
2. Yajima, I., Ahsan, N., Akhand, A. A., Al Hossain, M. A., Yoshinaga, M., Ohgami, N., Iida, M., Oshino, R., Naito, M., Wakai, K. and Kato, M. (2016). "Arsenic levels in cutaneous appendicular organs are correlated with digitally evaluated hyperpigmented skin of the forehead but not the sole in Bangladesh residents." J Expo Sci Environ Epidemiol.
3. Yajima, I. and Larue, L. (2008). "The location of heart melanocytes is specified and the level of pigmentation in the heart may correlate with coat color." Pigment Cell Melanoma Res 21(4): 471-476.
4. Yajima, I., Belloir, E., Bourgeois, Y., Kumasaka, M., Delmas, V. and Larue, L. (2006). "Spatiotemporal gene control by the Cre-ERT2 system in melanocytes." Genesis 44(1): 34-43.
5. Yajima, I., Sato, S., Kimura, T., Yasumoto, K., Shibahara, S., Goding, C. R. and Yamamoto, H. (1999). "An L1 element intronic insertion in the black-eyed white (Mitf[mi-bw]) gene: the loss of a single Mitf isoform responsible for the pigmentary defect and inner ear deafness." Hum Mol Genet 8(8): 1431-1441.

学友会の皆様におかれましては、時下ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

2019年4月1日付で、芝浦工業大学システム理工学部生命科学科教授を拝命いたしました。この場をお借りして謹んでご挨拶申し上げます。

私は東北大学理学部生物学科を卒業後、同大学で博士号(理学)を取得しました。大学4年時から博士号取得までは主に発生学と遺伝学を学び、特にメラニン色素を産生し、皮膚色や毛色を制御する色素細胞(メラノサイト)の研究に邁進していました。当時は医学のことなど全く考えておらず、ただひたすら生命科学の面白さ、不思議さに魅了され、日々研究に打ち込んでいました。特に自然突然変異マウス mi-bw の原因遺伝子を初めて同定することに成功し、毛色の制御に関わるメカニズムの一端を解明しまし

た。また当時は分子進化にも興味を持ち、脊椎動物の祖先型と言われて入れるホヤが持つたった2つだけの色素細胞の発生機構や相同遺伝子の単離・機能解析などを行いました。現在の私の分子生物学などの生物学研究の基本技術・思考回路はすべてこの時期に形成されています。留学先の Institut Curie (France) では、色素細胞の基礎研究とともに、色素細胞が癌化することによって生み出される悪性黒色腫(メラノーマ)の発症機序及び治療法の研究を活発に行なっており、私もこのときメラノーマ研究に従事することで、医学研究の重要性と面白さに気付かされました。

帰国後は中部大学大学生命健康科学部環境衛生学講座を主宰しておられた加藤昌志教授(現・名古屋大学大学院医学系研究科環境労働衛生学教授)に導かれ、「環境衛生学」という学問に出会うことになりました。この出会いが今の私の多くを形作っています。「環境がヒトに与える影響を実験科学的、疫学的に解明する」という研究手法を叩き込まれ、非常に多くの研鑽を積むことができました。特にヒ素を含む重金属曝露による疾患発症とその予防・治療法開発に情熱を注ぎ、様々な成果を残すことができました。その後、加藤昌志教授の名古屋大学への赴任を転機に、私自身も名古屋大学へと赴任してきました。ここではさらに大規模で高いレベルの衛生学研究を実験研究と疫学研究を両輪として実施してきました。特にヒ素曝露による皮膚がん発症機構の解明に注力し、新たな関連分子の同定や皮膚がん発症機構の一端を明らかにしました。

これらの研究の中で私にとって光明であった一つは、ヒ素によって誘発される皮膚疾患の一つに黒皮症(hyperpigmentation)と呼ばれるメラニン色素異常症があることでした。大学生時代に学んできた色素細胞学と、フランスからの帰国後に新たに身に着けた衛生学とが重なる瞬間でした。私はこれを啓示的に受け止め、これからも色素細胞研究と衛生学研究を常に意識して実施していくことを決意しました。

こういった経緯の中で、今回芝浦工業大学システム理工学部において、工学系の芝浦工業大学の中で唯一の生物系である生命科学科に教授として着任できたことはまた新たな啓示であるような気がしています。基礎生物学から出発し、(社会)医学を学んだ末に再び生物学の世界に戻ってきたことは、生物学研究をこれから実施する中にこれまで学んできた医学、特に衛生学のエッセンスをできるだけ多く取り入れていくことが重要になると考えております。

今後は名古屋大学から離れることとなりますが、これからも様々な形で名古屋大学との繋がりを保っていきたくと考えております。名古屋大学学友会の諸先生方には、今後ともますますのご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。